

IV-222 広島市太田川市内派川のイメージ解析(その1)

地域振興整備公団 正会員 小野 親一
東京工業大学工学部 正会員 中村 良夫
東京工業大学大学院 矢田 努

1はじめに 都市化の進行による河川周辺の環境の大きな変化にともない都市内河川の改修が進む中で、都市における貴重なオープンスペースとしての河川空間の役割の認識が高まり、河川の計画のあり方が様々な面から問われるようになってきた。河川周辺の住民の日常生活の面から河川機能のあり方を総合的に検討する必要があるといえよう。そこで、河川空間の環境計画のための資料を得ることを目的として、広島市内を流れる一級河川太田川と派川に対する市民の意識の構造と、河川上の地点及びそのまわりの特性について、事例研究を行なった。

2 調査 白黒のパノラマ写真を付した質問紙によるアンケート調査を行なった。

2-1. 調査内容と評価尺度 都市河川に関わる意識の構造を図1の様に仮定し、総合評価、快適性等に関する調査項目36項を系統的に選択した。評価尺度は

Semantic Differential法に準じて、反対の意味をもつ言語を両極にもつ5段階評定尺度とした(図4)。^{*1}

2-2. 調査の対象 調査の対象範囲は広島市内の三角洲地域全域で、これを分割して調査対象地区を42とした。調査対象者は各地区に居住する満16才以上(昭和51年11月27日)の広島市民より2段階無作為抽出した。^{*2}

2-3. 調査の実施 昭和51年12月11日~13日に調査を実施した。地域的評価用^{*2}1809票、広域的評価用^{*2}205票を配布し、回収率は各々78%、75%であった。

3 調査の結果と分析 得られたデータをもとに因子分析を行なった。直接バリマックス法による解と比較すると、地域的評価と広域的評価の構造に顕著な相違は見出されない。顕著な3因子(I~Ⅲ)とあまり顕著でない因子(Ⅳ~Ⅶ)が得られ、仮定された意識構造のモデルにより容易に解釈された(図1)。主因子解では2つの因子のみが独立の因子として抽出された。河川へ

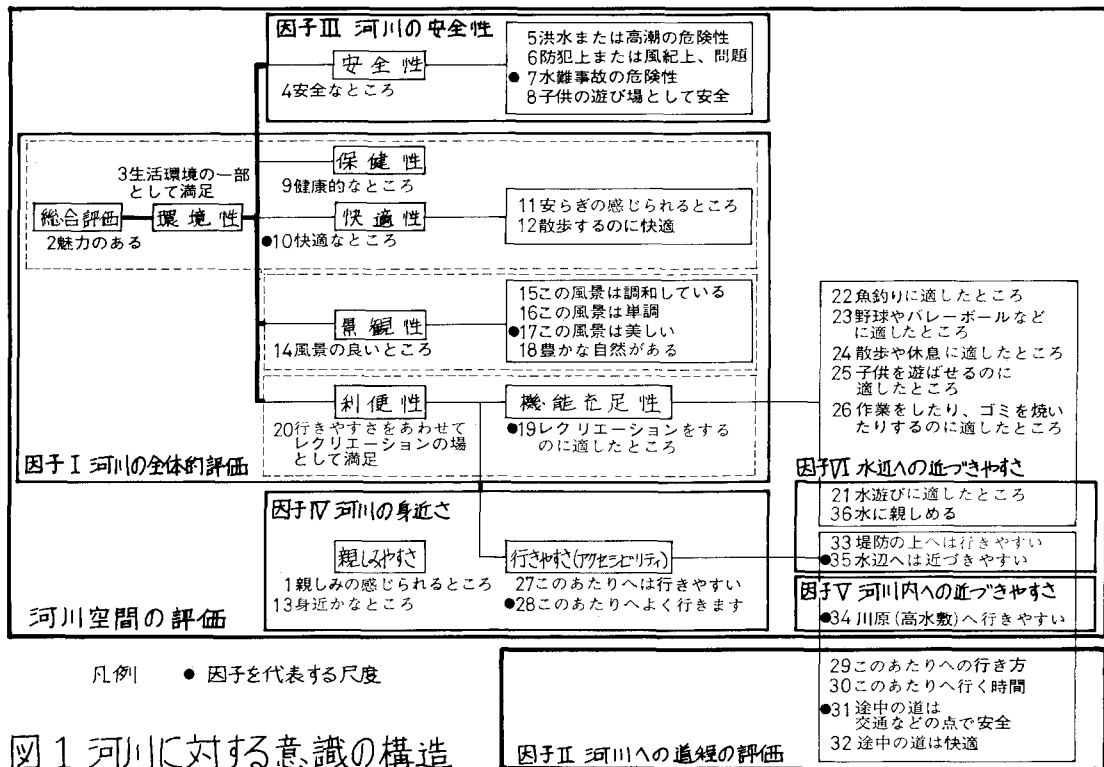


図1 河川に対する意識の構造

